

佐渡巡検報告 佐渡の森林・林業

—相川町のシイタケ栽培を事例に—

宮崎 かおり

1. はじめに

近年、環境保護の観点から、森林への関心が高まりつつある。森林保全に対する取り組みが各地で行われ、森林が人間の生活にとって必要不可欠であるという認識も定着しつつあるように見える。しかし一方で、森林における主要産業である林業は、不振が叫ばれてから久しい。林業は森林を適切な状態に保つためにも必要と言われるが、いまだのような状況にあるのだろうか。これを佐渡を事例として探してみたい。

佐渡島は、総面積85462 haに対して林野面積は61529 haあり、林野率72%と森林の多い島である。この林野率は日本全体での値にほぼ等しく、両者の森林の状況に共通性があることが予想される。一方、離島という地理的条件や、大規模な金山があったという歴史的な条件が、佐渡島に特徴を与えていることも推測される。本報告では、佐渡における林野制度について概観した後、とくに特用林産物に注目して現在の林業の状況について述べたい。

表1 1994年度保有形態別林野面積
相川林業事務所資料から作成 (単位 ha)

	佐渡	相川	
国有林	2550	590	
公有林	県有林	3027	2938
	県行造林	292	122
	市町村有林	3969	465
	市町村行造林	131	0
	財産区有林	1800	0
公有林 計	9219	3525	
私有林	部落有林	8283	3627
	会社有林	730	653
	社寺有林	1019	94
	生産森林組合	2378	144
	公団造林	1738	161
	公社造林	696	143
	その他民有林	34916	7679
私有林 計	49760	12141	
民有林 計	58979	15666	
合計	61529	16256	

2. 佐渡の森林と林業の特色

(1) 佐渡の森林保有形態

森林保有形態(表1)では、民有林が国有林に比較して多く、全森林面積にしめる割合は96%に達する。一方、新潟県全体では、国有林面積235917 ha、民有林面積573653 haであり、民有林の割合は71%である。

なお、民有林には、公有林と私有林が含まれる。公有林には、県有林、市町村有林、財産区有林などが含まれる。私有林の区分は複雑で、私有林には部落有林、会社有林、社寺有林、生産森林組合有林などが含まれる。佐渡の民有林では、公有林3525 haに対して私有林は12141 haであり、私有林が多い。

(2) 佐渡の森林面積実態

樹種別の森林面積を、表2に示した。人工林ではスギが最も多く、ついでマツ類である。かつて

表2 1999年度森林面積実態表
相川林業事務所資料から作成 (単位 ha)

		佐渡	相川
人工林	スギ	10652	2891
	アカマツ	1616	72
	クロマツ	79	22
	その他	429	228
	針葉樹小計	12776	3213
広葉樹	キリ	34	7
	その他広葉樹	44	2
	広葉樹小計	79	9
人工林計		12854	3222
天然林	スギ	66	57
	アカマツ	1464	90
	その他針葉樹	264	242
	針葉樹小計	1793	389
	広葉樹	42	0
広葉樹	その他広葉樹	41975	11439
	広葉樹小計	42017	11439
天然林計		43810	11828
竹林		1029	29
伐跡		36	9
草生地		2748	730
その他小計		3813	768
総計		60477	15818

はスギは佐渡特産の味噌をいれる樽などに大量に使用されていた。針葉樹で「その他」となっているもののなかには、アテビ(ヒノキアスナロ)も含まれる。数は多くないものの、キリの植林も見られる。キリは国中平野西部、及び小佐渡に多いようである。

天然林ではアカマツが多い。しかし1985年頃から松食い虫による被害が大きくなり、大きく減少した。現在も被害はあるが、駆除は一定区域でしか行われていない。

ブナは冷温帯植生を代表する樹木である。佐渡

島の東南部は暖流の影響で暖温帯的であるが、北西の海岸は冬季の季節風の影響で冷温帯的である。そのため、ブナは北西部の大佐渡山地の、標高600~700m以上に出現し、東南部の小佐渡ではみられない。

その他、竹林は東南部の小佐渡に多く分布する。

(3) 林産物の推移

主な林産物であるシイタケ、用材、薪炭材、木炭について、生産所得の推移を図1に示した。これらのなかでは、シイタケの所得が最も多い。用

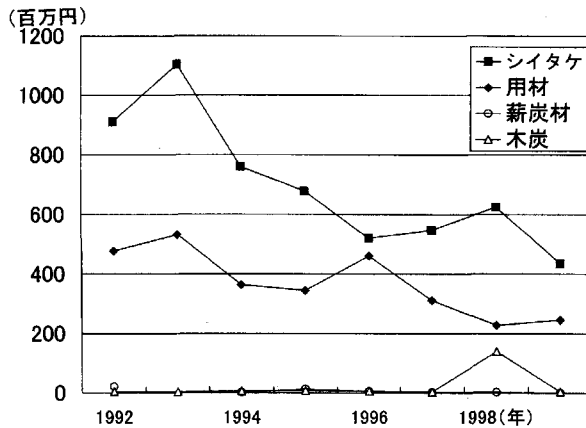


図1 佐渡における主な林産物所得の推移
『離島統計年報・平成11年度』から作成

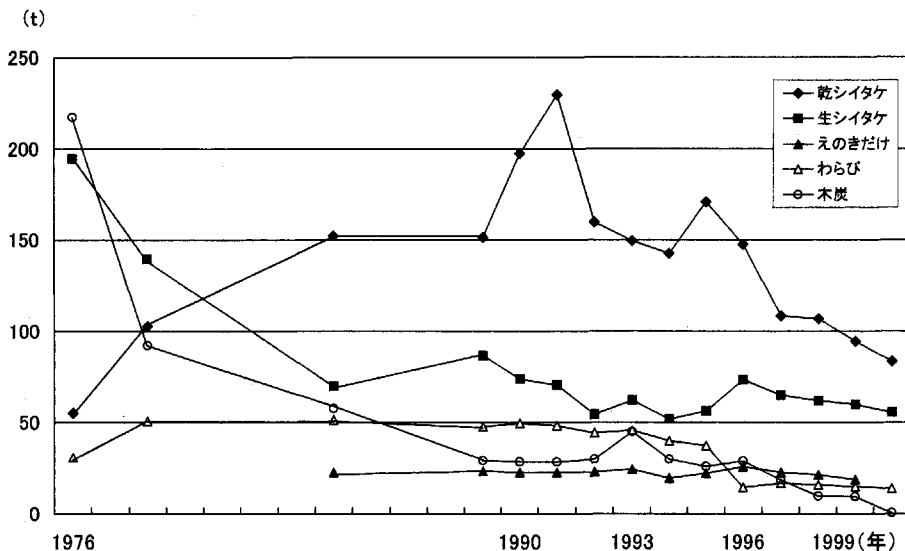


図2 佐渡における主な特用林産物生産量の推移
相川林業事務所資料から作成

材と薪炭材はおおむね減少を続けている。

次に、特用林産物²⁾の生産量の推移を見る。

まず、図1からも類推されるように、乾シイタケと生シイタケあわせのシイタケの生産量が、他の林産物と比較して多い(図2)。しかし、乾シイタケ生産量は1991年をピークに減少傾向にある。生シイタケ生産量は全体としては停滞気味である。近年、生シイタケの生産方法では原木栽培が減少し、菌床栽培が増加している(図3)。原木栽培は、秋から冬にコナラやクヌギを伐採し、1~2ヶ月乾燥させた後に種菌を接種する方法で、収穫まで通常2年ほどを要する。一方、菌床栽培は、原木栽培よりも発生収率が高く、作業が簡便

で収穫までのサイクルが短い。また、気象条件の影響を受けにくいという利点もある。

竹材は、かつては前述した味噌樽の輪竹などにも大量に用いられていたが、生産量は大きく減少している(図4)。キリはタンス用材とされることが多いが、とくに佐渡では「小木箆筒」に代表される需要が多く、植林も行われていた。しかし、最近では生産量は減少の傾向にある(図5)。

以上のように、かつては盛んに生産されていた林産物も、ほとんどは低迷を続けている。その中では、シイタケの生産は佐渡における主要な林産物と見られる。そこで、1997年までは町村別で島内生産量1位だった相川町で、シイタケ生産の

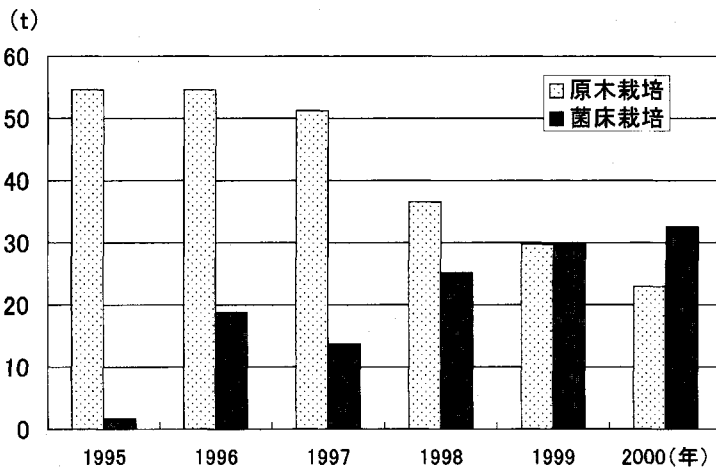


図3 佐渡における栽培方法別生シイタケ生産量の推移
相川林業事務所資料から作成

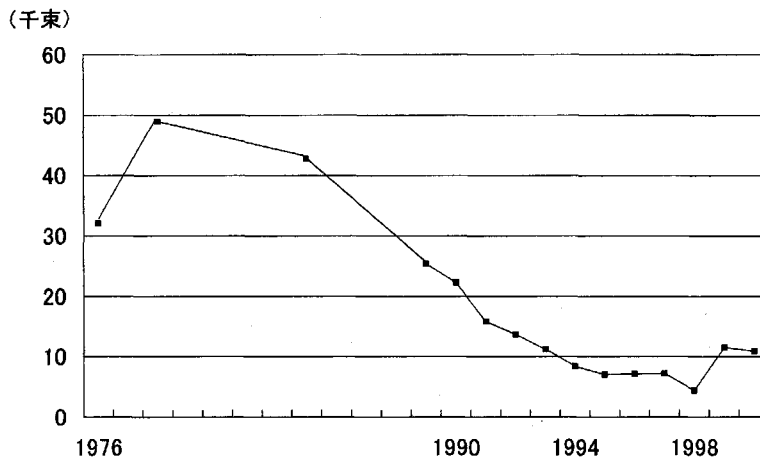


図4 佐渡における竹材生産量の推移
相川林業事務所資料から作成

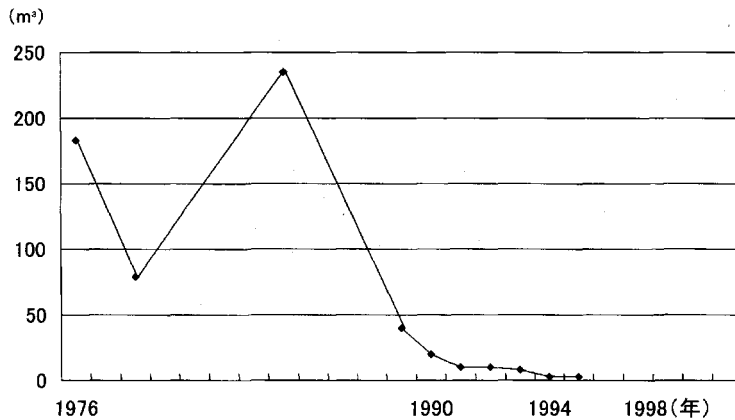


図5 佐渡におけるキノコ生産量の推移
相川林業事務所資料から作成

状況を調べた。

3. 相川町におけるシイタケ生産

(1) 相川町の概要

相川町(図6)は、佐渡島の北西部に位置し、佐渡金山があった町としても知られる。町域面積は19228haで、森林面積は15764haである。森林率は82%と、島内の市町村のなかでは最も高い。人口は10330人である。町域の大部分は大佐渡山地で占められるが、長い海岸線を持つため、農林漁業すべてを兼業している世帯が多い。

(2) 相川町におけるシイタケ生産

調査は相川町南片部地区(図6)で行い、特用林産物の指導林家である堺信男氏に聞き取りを行った。

堺氏によると、相川町でのシイタケ栽培は大正時代後半頃に開始されたようである。佐渡は対馬海流の影響で比較的温暖なため、シイタケづくりに適していた。

相川町におけるシイタケ生産量の推移を図7に示した。相川町においては、生産されたシイタケはほとんどが乾シイタケに加工されており、生シイタケは少ない。その理由は、島外へシイタケを輸送するときには海上輸送となるので、保存がきき運搬しやすい乾シイタケが適していたためである。佐渡全体では、乾・生シイタケの生産量は差がなくなりつつあるが、相川町では依然として乾シイタケが多い。また、相川町では今も原木栽培が多い。

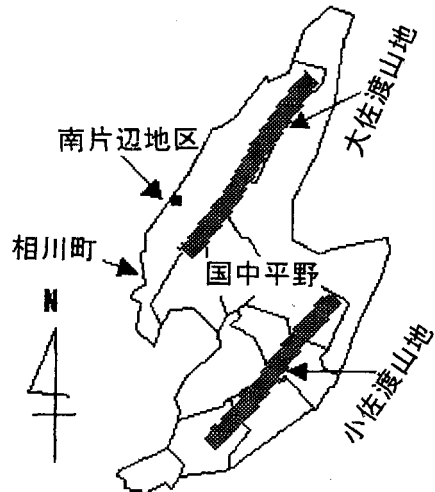


図6 相川町と南片辺地区の位置

1970年代後半から1990年にかけて、シイタケ生産はピークを迎えた。当時、「こんなにおいしい商売はなかった」という。多くの人は農家の副収入源として始めたようである。

しかし、1991年頃から生産は減少し始めた。1995年に一旦増加するものの、その後も減少を続けている。その理由としては、気候温暖化による不作、後継者不足、さらに1993年頃から中国産の輸入が急増したことなどが考えられる³⁾。

以上のように、現在、相川町においてもシイタケ生産は減少傾向にあり、過渡期を迎えている。生産を奨励するために、県や町では各種の補助事業を行っており、生産に関する情報提供、栽培農

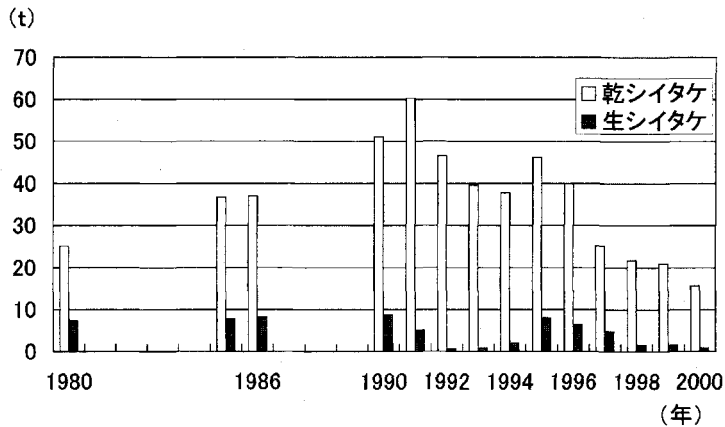


図7 相川町におけるシイタケ生産量の推移
相川林業事務所資料から作成

家への機械類リース料補助，生産意欲・技術向上のための品評会，入礼会，生産流通研修会の開催などがある。

しかし，これらの補助事業が，全て生産向上に結びつくかという点では疑問もある。行政による過度の補助は，生産農家の競争意欲を低下させるおそれもある。この点も十分に考慮しながら，補助事業は行われなければならない。

流通の面では，シイタケは林産物に分類されることから，以前は森林組合が扱っていた。しかし，1970年代後半から農協が流通に参加し始めたため，流通経路が複雑になった。農家は，森林組合と農協の両方，あるいは片方だけを利用し，まちまちであった。そこで，この複雑さを解消し，生産農家のまとまりを深め，流通も自分たちの手でやっていくために，1995年に堺氏を中心に生産農家による「相川町シイタケ振興協議会」が発足した。このように生産農家側でも，生産量の減少に歯止めをかける独自の努力を継続して行っている。さらに今後は，生産管理だけでなく，流通も見越した生産活動が予定されている。

4. 佐渡における現在の林業

以上，特用林産物を中心に佐渡の林業をみてきた。林業をとりまく状況が厳しいのは，佐渡でも全く例外ではなかった。

相川林業事務所によると，いま森林組合に所属する森林技術員には若い人が少ない。2000年現在で，60歳以上が約7割をしめている（図8）。若

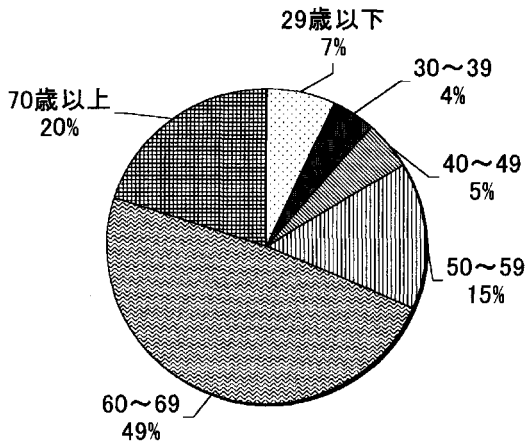


図8 森林組合森林技術員の年齢構成
2000年度相川林業事務所調査

手が少ない背景には，林業労働の厳しさもあるだろうが，雇用形態の要因も大きいと考えられる。安定した通年雇用は115人中10人で，全体の9%にすぎない。残りは，繁忙期の期間雇用が88人，臨時雇用が17人である。このため，「林業に就きたい」という若者がいても，定着が難しいこともあるようだ。

林業不振の状況のなか，県では林業に携わる人に技術や知識の指導を行う「佐渡林業実践者大学」を1980年から開催し，林業を継続させるための独自の努力も続けている。

しかし，産業としての林業の不振はやはり避けられず，行政関係者によると「森林に対する視点

の軸は、一般人にシフトしていかざるを得ない状況だ」という。そのひとつとして、緑化活動等を行う「緑の少年団」が、県下112市町村で設立された。佐渡島内では10団が活動している。また、佐渡のアテビを特産品にしていこうとする、一般の動きもあるという。

5. おわりに

林業の現況は、森林保全の必要性が訴えられてはいる現在でも、大変厳しいものであった。本稿では特用林産物に焦点を絞ったが、木材などの林産物ではさらに希望の持てない状況にあることは明らかである。森林を保つためには、一般市民の参加へシフトしていかざるをえないという意見は、現実的に聞こえた。しかし、だからといって林業の衰退を放置していいわけではなく、多様化した人間と森林との関わりを貫く伝統的な軸としては、林業はやはり最も有効だと思う。今後、その視点を忘れずに、森林保全の問題にアプローチしていきたい。

謝辞

現地調査においては、指導林家の堺さん、相川町役場農林水産課の菊地さん、相川林業事務所の岡村さん、寺島さん、若林さんほか関係者の方々には大変お世話になりました。この場を借りて厚くお礼申し上げます。

注

1) 民有林が圧倒的に多い理由のひとつは、江戸

時代には幕府の直轄地であったことから、直轄林野である「御林」が存在したことである。御林は、明治9年の調査では201カ所あり、明治時代に官林に引き継がれたが、のちに地元払い下げられた。さらに、登記簿上は個人有でも、実際は部落有林がかなりあると考えられる。

- 2) 林野から生産される、木材を除く林産物を特用林産物という。
- 3) 2002年2月現在、乾シイタケは緊急輸入措置制限の監視品目となっている。

文献

- 相川町 (1997) : 『町勢要覧・平成9年度・資料編』相川町。
- 九学会連合佐渡調査委員会 (1964) : 『佐渡一自然・文化・社会』平凡社, 349-353, 370-379。
- 菅原龍幸編 (1997) : 『キノコの科学』朝倉書店。
- 瀬沼賢一 (1981) : 「佐渡島の植生分布と気候の関係」佐渡博物館研究報告, 第8集, 61-71。
- 日本離島センター (1999) : 『離島統計年報・平成11年度』日本離島センター。
- 両津市郷土博物館 (1997) : 『佐渡一島の自然・くらし・文化』両津市郷土博物館。

みやざき・かおり

お茶の水女子大学大学院人間文化研究科
発達社会科学専攻・地理環境学コース